The Last Act **終焉のラグナロク【改】**

利瀬 時夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Last Act 終焉のラグナロク【改】

【Nコード】

N0984Z

【作者名】

利瀬 時夜

【あらすじ】

まあ聞いて欲しい。俺は普通で健全な男子高校生だ。魔法ないし超能力も使えない本当に普通で無能克健全な男子高校生だ。そんな無能克普通で健全、友人A級に脇役な俺が何故に異世界何ぞに召喚されなきゃならない？魔王でも倒せば還れますか？ 良し、なら魔王倒してやんよ と言うのは今は昔。しかし、旅立とうとしたその日を境に、俺の人生は270度変わる事となる。これは『どうしてこうなった』から始まる、俺の俺による俺らしい物語。主人公最強系異世界トリップファンタジー此処に開幕。 削除に削

除され、漸く設定プロットを書き直し書き終え、此処に開幕。生々しいとまでは言いませんが性描写、残酷克卑猥な描写が含まれる上に、カオス克登場する伽羅の偏りが御座います。以上の事が了承出来る方のみお読み下さい。読んでくれれば幸い、感想や指摘、評価をしてくれれば泣いて喜びます。ではどうぞ。。(アクセス数6000突破、まだまだ行きますよ!!さてさて、第一部始動！怒涛の展開が今……！

登場人物紹介（随時更新）

名前：佐久間敬一 | Keiiti Sakuma |

真名：伊邪岐 | Izana |

真名：紗紅魔刑一 | 殺神鬼化真名 |

年齢：19歳

身長：174cm / 55kg

容姿：黒髪黒眼華奢克細身の女顔故に『女みたい』と言われるとキ
レル

職業：高校生

属性：正義、秩序、卑怯

付属：？全知の魔眼？を封じる為の布

？TRAN-SIMAVeRFirst？

教訓：『君子危うきに近寄らず』

台詞

『やれやれ これじゃあ天に現れる女神も見落としちまっぜ？』

『阿吽！？』（殺人鬼化）

能力

デイドリーム・クリエーター

『創始創造』

デインスフェル・ディステイヴァー

『不死身軀』

宝具

我纏う限り無き誇りよ、姿を現せ

アンリミテッドランキライザー
『無限の器創』

恩寵を以って貫きし者よ、繰れ

ザ・キングニール
『轟戦神槍』

参れ繰れ降り迎え討て

フリッツィアヘヴイーンズ・アハルティアー
『天迎討尽息吹』

嗚呼、迎え討て砕け散れ壊し尽くせ、愛する者達の為に

サクシナム・ケ
『殺戮』

狂刃』

背護る者へ己が力を、前戦う者へ我が命を捧げよう

アハトヘルト・インフォールティアーゼ
『別与伝得』

快楽悦楽、思うが故に迸る淡く儂き一夜の夢よ、永久に続く為に、

全てを染め上げる

ハラダイス・ザ・エデン
『歓喜樂園』

我が剣を我が盾となる事をその身を以って痴れ

マスター・オブ・サーヴァンツ
『主従関係』

宿れ目をも穿つ眩き煌きよ、我栄光を刻む者なり

シャカン・シエキナー
『陽煌輝弓』

虚空を彷徨う箱より出でる破滅の力よ、天を覆い、地を焼き払う悪

魔の力よ、我が手にその身を曝け出せ

レイヴァ
テイ
『害為す魔剣』

性格

余裕綽々、飄々とした態度が特徴的で、天才的なまでの器用。

宿っている創始創造の能力で宝具を作り出してしまふ等イレギュラ
ーな一面も見られる。

顔立ちが女顔なので、女みたいと良く言われる。温厚で人当たりの
良い人物。

運動神経も頭も悪いわけでは無く、並々。特筆すべき点は特に無く、
悪い点も無い普通の男子高校生。

極ドS変態鬼畜悪魔と言われるが「その通り」と言って受け流す等
スルースキルを得ている。

自分の大切な物、大事な人、護らなければいけない居場所は命を掛
けてでも護る1人の男。

神話、宗教、伝説、世界史等に興味を持っている為、様々な点に脳
が働く切れ者でもある。

天性の戦闘センスを持っており、普段は優しく飄々としているが、
当時中学時代荒れていたと言う経歴もあり精神内に？殺人鬼？或い
は？殺神鬼？を宿している。

極度のシヨックや意識が飛ぶほどのダメージを受けると変貌し、口
調は挑発的克飄々と、ポエマーとなり、相手を殺す事を快樂として
直結する様になる。

ツッコミ役として稼動し、天性の女垂らしたが、無自覚故に良く女
性の敵と言われている。

名前：水瀬朔夜 | Sakuya Minase |

真名：十六夜 | Izayoi |

年齢：16歳

身長：154cm / 不明

容姿：藍色のポニーテールに藍色の深い黒い瞳。華奢克細身ながら美少女。

職業：高校生

属性：正義、正々堂々、秩序

台詞

『私は誇り高き騎士！！ その誇りを汚す事は赦さない！！』

『ちよ、待つて欲しい……、その、あの……、恥ずかしい、のだが』

能力

ヴァルクキュレート・ヴァルクキュリー

『戦場死体』

宝具

乱れ狂えよ、その香りで我を勝利へと誘い導け

ブリュン・ヒルデ
『勝利誘導剣』

宙に舞い咲け、降り注げ

ゲイル・スケルグ
『槍戦』

空を喰らい蝕み、食み果てる

スケツギオールド
エルディ・フレック
『武斧時代』

響け騒がせ纏い食い散らかせ

『武騒装音』

穿ち貫きし者達よ、進み進んで貫き通せ

ゲイ・レルル
『槍持進軍』

地に残しし御伽噺の天破槍よ、我痴れ汝痴れ、そして我に纏い降れ

レキン・レイヴ
『神残真槍』

覆い困う光の妖精達よ、我等を護る剛健実質と成りて眼前に現れよ

ジアルド・ヘルヴォル
『軍勢守護』

性格

能力の名前を忌み嫌う二人目の勇者。

強気克弱い所を見せないで有名な勇者だが、実際は弱く、脆弱で、泣き脆い。

リーダーシップを張れる人物で、中心的存在になれる人物。まさしく主人公と呼べる人材。

撫でられる事や、突然の頬へのキス程度で慌て、恋愛に対して疎く、惚れ易い性質の持ち主。

自分の誇りを汚される事を嫌う、真つ当な騎士道を生きる事を誓つ

た。

勇者としては精神面が脆い一面も見られ、特攻タイプなので、脳筋といわれる場面もある。

敬一以上の天性の戦闘センスの持ち主で、頭は悪いが運動神経は抜群。

ブリュンヒルデを苦も無く振り回す事が出来る上に、両手に槍と剣の奇妙な二刀流を扱う事も出来る。

戦場では英雄と称され、何処ぞかの国では『旗持ち戦場を駆け抜ける戦女神』、称して『ジャンヌ・ダルク』と呼ばれる事もある。

名前：エリシアⅡエルキュアーゼ

年齢：18歳

身長：157cm / 不明

容姿：淡い紫混じりの銀色の髪に紫色の瞳をしている

職業：メイド

属性：正義、ツンデレ、秩序、主人愛

台詞

『ケイイチ様はもう少し女心を知るべきです』

種族：『人間』
ヒュエム

魔法

フルクランツ・フルグラティオー

『極零凍結』

ヴァイテイアンテ・ダンシユーマ

『疾風乱舞』

性格

氷と風の魔法を扱う城のメイド。

美少女の類に確実にカテゴライズされ、胸の事を指摘されるとキレる。

主人公対して、女心の分からない大馬鹿と言っている。

ツンデレで、人当たりが良く、温厚克優しい為女性からも好かれる人物。

仕事に関しては最初の頃は酷かったと言う。

主人に尽くす事を専念し、それこそ主人を裏切る事は絶対にならない。撫でられる事、キスされる事を好み、普段は冷静沈着克毒舌でもある。

名前：イデア＝サターシアンツ

年齢：17歳

身長：162cm / 秘密

容姿：金色の長い髪に碧眼。

職業：騎士団第一総長

属性：正義、秩序、平和

種族：『人間』ヒューマン

台詞

『脳筋脳筋と！！ 私は脳筋ではない！！』

魔法

『オルズマイ・ヒルディアート 肉体強化』

特技

『王国流剣術』

『我流剣術』

性格

『サターシアンツ』侯爵家の娘であり、相当な剣術の使い手。

気高く孤高だが、実際脆弱で脆い。朔夜に似ており、それでいて騎士道精神全開。

敬一曰く「面倒な相手」だと言う事。彼女もまた撫でられる事、褒められる事が好きで、自分の事を女性と想ってくれる人物を探していると言う。

戦いに関しては天才だが、他の者ことは馬鹿故に『脳筋』とも呼ばれる。

剣術では王国一だが、世界は広く、実質敬一に敗北している。

『サターシアンツ』侯爵家と言えは有名で、必ず子孫は『最も強き者』として生まれ、戦場で活躍し、名を馳せる。

言ってしまったえば戦争の道具である。しかしそれに気付かぬ息子や娘達は皆、戦場で散って行く。その様に彼女はある人物を尋ね出家をし、彷徨っていたと言う。

名前：クレアーフィル・ヴァンティエキュート

年齢：17歳

身長：156cm / 不明

容姿：赤茶色の髪にブラウンの瞳

職業：城内総料理長

属性：料理一筋、正義、ツンデレ

種族：『妖精^{エルフ}』

台詞

『アンタ達、いつまでそうやってるつもりだい？』

魔法

メルフ・エルフェランテ

『火焰業火』

エアジス・グロースエアレリック

『大地鼓動』

性格

炎と大地系統の魔法を扱う、城の中の厨房内総料理長を務める美少女。

頭も良く、運動神経も並々。

浅はか過ぎるツンデレで、皆の前ではクール冷静沈着その物。

耳が弱点である事は既に敬一にバレていたりする。

ツンツンばかりでデレる一面や可愛い場面が見られないと言うが、

実質、蟲が嫌いと言う可愛らしい一面を持つ。

名前：リーラ・ゲシュタルト

年齢：15歳

身長：151cm / 秘密

容姿：藍色混じりの灰色の長い髪に、猫耳と尻尾持ち。藍色の大きな瞳をしている。

職業：メイド

属性：花壇大事、正義、デレデレ

台詞

『仕方ないよ、ご主人様はエリシアお姉ちゃん曰く馬鹿だもん』

種族：『アニシエル獣人』

魔法

サンディア・フリッツェル

『雷撃稲妻』

ホーライト・ヒーリングベア

『邪傷治癒』

性格

猫耳猫尻尾持ちのメイド。しかし耳と尻尾は猫故弱点。

城内でもマタタビ使用禁止が出ている。運動神経は良く、聴覚に優れている。

跳躍力が半端では無く、滞空時間も3秒近い。

甘えん坊の撫でられ好き。不定期だが発情期に襲われた場合は即急の避難が必要とされる。

猫故か運動神経も良く、実質語尾に『にゃ』が付く場合がある。

9

名前：ミアーシャルド＝アクティア＝トリエニスタ

年齢：17歳

身長：155cm / 秘密

容姿：クリーム色をした金色の長い髪に碧眼。

職業：トリエニスタ皇国姫君

属性：正義、婚約発言、秩序

台詞

『これじゃ、これを守っていたのじゃ！！ この囚われの姫と言っ物を！』

種族：『ヴァルブルギス吸血姫』

魔法

ブラックタ・ラ・ダークネス

『漆黒闇夜』

バーフェクトリィ・ゼロニズム

『絶対零度』

性格

普段は幼女体系だが、満月の夜のみ完全な姿、所謂姫君へと変貌する吸血姫。

皇国の姫君であり、ぶっ飛んだ発言をするが、本人曰く「自分の本音を伝えただけ」との事。

闇と氷を使用し、凍らせ、闇に沈める等と言う芸当も出来る。

気高く、孤高ながら、デレる時はデレ、厳しい時は厳しい人物。

本気で怒られるという経験が無く、怒られると泣いてしまう一面も。案外寂しがり屋な一面も見られ、可愛い等と言われると照れたりする。

物語用語紹介（随時更新）

ⅡファイアデルファイアⅡ

本作の舞台となる異世界。

魔力が主力の世界で、科学技術は一切存在しない。

五つの大陸より構成されており、

？ 東方国家群

？ 西方国家群

？ 北方国家群

？ 南方国家群

？ 中央国家群

と言つ具合に別れ、成り立っている。

中央国家群は主に『国家群の中でも主力国家の王、或いは皇帝達による会議』を行う為の場所であり、機関。

フロ・エンペシアシステム

『護帝機関』と呼ばれるそれぞれの国家の様子を見守る国家主力最強主も存在するが、滅多に顔を出す事は無い。

ルシア・オブ・ウオーグ・エクティアアーヴ

Ⅱ軍神使用禁止令Ⅱ

軍神と呼ばれる軍を司る戦の神の召喚を禁止する条約。

止む終えない場合は中央国家群の王に頼み、許可を出す事によって使用許可が出される。

例えるならば軍神にも種類があり、炎を司る軍神、龍型軍神などで使用方法が異なる。

召喚する存在が強大であれば強大である程、使用許可は出難い。

Ⅱエクトリアス帝国Ⅱ

東方国家群西部を支配する強大なる軍事国家。

覇権主義を掲げた帝国で、東方国家群完全統一に乗り出す。

魔法技術、軍事兵器技術技術関係どれに置いても最優秀である。

「アーククライズ王国」

東方国家群南部を支配する覇権主義国家。

豊かな農地と水流を得た為、水産業と農業が主力となっている。西をエクトリアス、北をカメルディアに挟まれており、戦乱が耐えない。

実質軍事関係に置いてはエクトリアスに一步譲るも、策では勝るとも劣らずだと言う。

城壁は最新鋭の対魔物避け結界が張り巡らされている。

「カメルディア王国」

東方国家群北部に位置する自然国家。

周囲を樹林、砂漠に囲まれており、魔物の侵入を避ける為に魔物避け結界を張っている。

しかし樹林、砂漠が有る為に農業については困らず、水産業についてもアーククライズより輸入する時があるので困らないと言う。

豊富に産出される貴金属非金属を輸出しており、その中でも鉄鉱石の産出量は東方国家群一である。

「トリエニスタ皇国」

東方国家群最北部を支配する覇権主義国家。

エクトリアス帝国とは現在冷戦状態であり、諸国家群と同盟を築いており、完全支配を目論む。

『ディアック同盟』と呼ばれる『戦争時には協力する代わりに、食糧や物資を諸国家に提供する』と言う同盟を結んでいる。

戦争撲滅を考えており、掲げているのは『戦争根絶』で、国家の中でも最も平和主義な国家でもある。

「エスカンティア王国」

東方国家群東部に位置する最後の覇権主義国家。

実際其処まで覇権主義争いには入ろうとはせず、隙を窺っている。周囲には峻険な山々が聳えている為、国に来るだけでも容易では無い。天然の防壁とでも言う様に雪が山頂に積もる為、雪崩が良く巻き起こる。

東方国家群中央部への侵略を目論んでいる。

〓 シャンカティア半島 〓

東方国家群の中でも最東部に位置する無法区域。

森林地帯で、魔物が多数出現し、危険区域として指定されている。

史記の持つ領土であり、土地。

己の住む居場所であり、それでいて軍事拠点として置いてあり、魔物も全て一層したらしい。

〓 エルクバルズ王国 〓

元々敬一を召喚した王国。

既に敬一による滅ぼされ壊滅状態となっている。

元々治安と政治は最悪だった様で、壊してくれて有難うと言っている。

王は？ ミーニス・シャレ 〓 エルクバルズ？ だが、既に他界。

〓 魔力 〓

フィアデルフィアの主力動力。

魔力による兵器操作や、魔力による魔物避け専用結界。

或いは空を舞う舟？ 飛空艇？ の動力源、空を舞うバイク？ 空舞車？

エアバイク

の動力源としても使用される。

炎を起こす程度ならば魔石と呼ばれる魔力の秘められた結晶を使用すれば良いが、電力水力問題はまた違う。

電力は巨大な魔水晶と呼ばれる魔石の上に存在する莫大な魔力を保持する結晶を使用し、水力も同じで、これを国の何処か安全な場所

に保管すれば完成である。

後は水道管や電線を繋げれば完全に国家として成り立つ。

魔法として使用する場合は？スベルワード起源言語詠唱？を刻み紡ぐ必要があり、自然干渉を絶対とする。

シエロツール
|| 天鍵 ||

魔水晶破壊時に使用する『天より捧げられし鍵』。

魔水晶に触れるだけで破壊可能。

しかし、破壊時の衝撃は大きい為触れた瞬間に回避行動或いは防衛行動を取る必要がある。

|| 術式解放 ||

法術（完全に決められた方式からの術式解放）や連術（連続での術式解放）時に行われる連続魔法。

問題点としては放つたびに莫大な魔力を消費する事でもある。

エアエリック ツウファイ ドラグーン
|| 尾鰭引く双魚の刃 ||

空中行動を行える部隊のみに告げられる命令。

空中からの攻撃を加えつつ地上への進軍をすると言つ同時並行時に使用される。

が、まずは空中からの攻撃中に攻撃を喰らい、ワイパーン グリフォン飛龍や鳥龍達が混乱を起こした時点で失敗となる為、一人囷を必要とする。

その場合、最も戦場で最前線を駆け抜け抜ける人物が適材適所される。

レヴォイト・ディレストラクチャー
|| 革命軍 ||

奴隷制度、人種差別などと言う人権に背いた制度や武力、決まり事、規定に対する反乱組織。

一組4名で構成され、必ず一組に一人は部隊自体を仕切る事の出来る人物を取り入れる。

魔法、遠距離、近距離、空中部隊でそれぞれ別れる為、仕切るには相当な人材が必要である。

スカレット・クロス
「紅十字」

反帝国組織団体。

壊滅された村の人間、街、町の人間達が集まって創られた特殊部隊
人数は相応で、数百人程度でもある。『帝国に聳える巨大な十字を
真紅に染め上げる』と言う事から名付いたと言う。

遠距離と魔法に優れており、近接は余り優れているとも劣っている
とも言えない物がある。

エル・デ・ライト
「煌きの剣戟」

トリエニスタ皇国精鋭の集う騎士団。

騎士団長？ヒエニス「ニーイスターリシュポーン？を主力に第八番
まで部隊が存在する。

第一から第三までは近接、第四から第六までは遠距離援護、第七第
八は魔法による援護と救急、衛生兵の部隊となっている。

ソード・オブライト レフト・オブシールド
「右手に剣・左手に盾」

王国帝国の公認組織。

主に王国帝国皇国の治安維持、政治経済へ役立つ為の行動を起こす
事が仕事。

年齢は10代から40代まで存在し、その年齢層の幅広さは通常の
騎士団隊を優に超す。

歴代騎士団長は皆戦場で散ったと言うが、第19代目騎士団長であ
る？リケア「イーヴオンバツ？は必ず戦場へ生きて帰ってくる？
不死身？と呼ばれる男である。

「ISTS (Infinite System The Sek
ond)」

帝国の空中要塞。他にもFSTF(Freedom System The First)やDSTT(Dhisuthiny System The Therd)が存在する。それぞれが『無限』『自由』『運命』を象徴しており、数も相当な物。

最終兵器としてはまだ思案中らしいのだが、製作途中と言う情報もあり、不明な状況とも言える。

|| TRAN-SAMIAverFerst(通称?IPES?)
?Instantaneous physical enhancement system ?瞬間肉体能力強化システムと呼ばれる敬一作のシステム。試作品故に使用稼働時間は数秒程度だが、それでも爆発的肉体強化が望める。

究極速度の産物とも呼ばれるシステムで、彼の覚醒条件でもあった。

第一話 夢想の果てに得た物

風が強い。

無限の蒼穹に浮かぶ白い雲が如実にそれを知らせてくれている。

昼の空に島がある。

雲よりは低い位置に浮く、風の強さ程度で動く事はない、東南に十数キロ延びた浮遊島だ。此処からでは良く見えないが、確か幾つかの都市と多くの小規模な街や村、森や草原、湖等によって構成されていると聞く。

いつか行つて見たい物だ。

子供の頃は次から次へと夢想する、魔物の住まう森、魔法、英雄、勇者　そう空に舞う島も例外では無く、俺はその空想に浸る事が多々あった。

いつしか俺は空想を棄て、現実を生きていた。空想に浸っても、それが現実になる事はないと知ったからだ。

しかし、それでは空を舞う島だけは忘れられなかった。

現実を生きていたはずの俺の夢にまで出て来た空を舞う島、そんな懐かしき思いに身を馳せながら、目の前の相手に告げた。

「俺は
」

それが俺の始まりであつて、終わり。

それが俺の終わりであつて、始まり。

皮肉な物だ、終わりも始まりも一緒だなんて。

そう、物語の始まりは約四日前の事だった　。

どうして……。どうして。

「どうしてこうなった……」

まあまずは聞いて欲しい。

俺は普通で健全な男子高校生だ。

魔法ないし超能力も使えない無能な、いや、無能と言うより一般的な身体能力と頭脳のみを持ち合わせた普通な男子高校生と言うべきだろう。

日常を謳歌している、まあ大学受験が迫っている故、完全に謳歌はし切れて居ないと思うが、それでも高校生活と言う貴重な時間を楽しんでる何処にでも居そうな若者さ。

特筆して良い所もなければ、悪い所もない。

友達曰く、お前って天然だよなと言われるが、何処が天然なのかわからない。

まあそれはさて置き、今置かれている状況を確認しよう。

何時までも現実逃避はしてられないからな。

俺は今、寝ている。

最初に目に飛び込んで来たのは知らない、見た事もない天井だった。見た感じ、硬質なのは無論、大理石の様な汚れ一つもない綺麗な天井だ。

それから俺の寝ている床も同じ材質だと認知して、上半身を起せば情報を少しでも多く得る為、周囲を見回した。が、それでも全く知らない場所だった。

(誘拐でもされたか、俺……)

有り得そうな事を思考してみる。

だが、直ぐに有り得ないと首を横に振った。

誘拐されるわけがない。何せ俺が寝ていたのは自宅のベッド、家の鍵もキッチンと閉めたし、電気も全部消した。ガスも止めたし

て違う、まあ故に家に忍び込んでまで、こんなむさ苦しい男を誘拐はしないだろうよ、ゲイなら分らないが。

(じゃあ此処は…… て、……これは?)

次なる情報を得ようと立ち上がるうとした瞬間、俺の目にある物が飛び込んで来た。

俺を取り囲む様に刻まれた円と若干だが朧気な光を発する不可思議な文字。試しに俺はその文字に触れてみる。

(暖かい……)

手に感じる温もりは光による発せられる熱の温もり。ふむ、新車の蛍光灯か何かか?

何だこれ、と掻き乱された思考のまま俺は更なる情報を求め、周囲に目を走らせ 数人のロープを纏う人影と気配に気付いた。

何、何、何これ。何此処、此処は厨二病患者の巣窟ですか? 何ロープとか纏っちゃってるんですか? 新車のファッション? うけるんですけどー!

俺は1人軽い現実逃避状態に陥っていると、1人の、黒いロープを纏った白い長い顎鬚あごひげを生やした老人が俺に歩み寄って来て、こう告げた。

「良くぞいらつしゃいました、勇者様」

この日を境に、俺の現実には270度変わってしまった。

第二話 決意は救済求める王国への歓喜の剣

その後俺はその男によって担ぎ上げられ、とある一室へと移動させられた。

一室は絢爛豪華とも呼べるに相応しく、小さいがそれでも眩い程の光を発する美麗なまでのシャンデリア、床には赤絨毯が隙間無く広げられている。

窓一つない部屋のようなのだが、此処は一体何処なのだろうか？

1人用意された椅子に腰掛けて唸っていると、あのローブを被っていた老人が俺と対峙するように俺の目の前に用意されている俺と同じ椅子に腰を下ろした。

腰掛ける老人に俺は目を向け、相手の言葉を待った。

すると老人は俺を見てから、まずは頭を下げた。

「真に申し訳御座いませんでした、勇者様。強制召喚何てさせてしまいました……、真に申し訳御座いません」

「へ、あ、あの……、いえ、大丈夫ですよ、怪我とかも、無いですし、はい。それより……、勇者つて、俺の事、ですか？」

これで頷かれたら神様居ないだろ 「はい、それで御座います」
神様は居ないみたいです、はい。

それから俺は矢継ぎ早に情報を注ぎ込まれた。

まず老人曰く、唐突に巻き込んでしまつて申し訳ないとの謝罪。

女性曰く、俺は勇者として召喚され、勇者なのだからこの国を救つて欲しいとの暴君。

男曰く、魔王を倒せば還れると言つ希望ながらテンプレ展開。

女性曰く、俺はこの国の希望であり、この世界を平和にする為の願いと過剰過ぎる期待。

最後に老人曰く、現在この国、エルクバルズ王国は近隣国家に侵

攻されているので、助けて欲しいとの救助要請、と。

ふう、さてさて……、これは俺の作り出した妄想か何かか？

まず俺が思ったのは何だこれと言う思う。いや、何だこれに以外に思い付かないって言うくらい、何だこれって思ったね。

勇者？ 俺が？

魔王？ 誰が？

希望？ 願い？

救助要請？ 俺が助けると？

まず言わせて貰おう、無理だろ、と。

テンプレ展開乙って言いたいね、これは。

何、何、何なの。これは。何この絵に描いたような理想なまでの物語の始まりは。俺別に物語の主人公になりたいとか願った覚えは毛頭ないよ？

それともこれは神様が俺に与えた試練？ いや、そうか、神様居ないのか、仏か菩薩か。

俺はその日、その一室を貸して貰い、悩みに悩んだ。考えに考えた。唸りに唸った。思考が焼き切れそうになるまで。

外で響く爆音や、激音を他所に俺の意識は現実世界の友人や家族にあつた。

突然居なくなった物だから、探しているのではなからうか。

結局俺は答えが出せぬまま、一夜を考え通して明けた。

「此処は……？」

翌日、俺は老人に連れられ、巨大な扉の前の立たされていた。

「此処から先はエルクバルズ国王王妃との謁見の間、王の間に御座います。」

私は身分上、謁見出来ぬ故、此処から先はお1人をお願い致します」

「え、ちょ、王様の部屋って事かよ……、俺正装してねえぞ」

数歩下がり、俺の様子を見ている老人を傍目に俺はそう呟いてか

ら、深呼吸をし、王の間の扉に触れた。

ひやりを冷たい金属製の板。俺はそれを押し開ける。何だ、案外軽いんだな、部屋の扉。

中に入ると、日本流で言わせて貰えば風光明媚克絢爛豪華な景色が俺を包んだ。

あの部屋のシャンデリアより数倍大きなシャンデリアに、赤絨毯。無駄に広い部屋は静寂と重圧、緊張の糸で支配されていた。

「汝が召喚された勇者か？」

瞬間、俺の背筋に悪寒の様な物が走った。

俺はその声に静かに頷いた。声の主はそれこそRPG宜しくな王様の衣装。

赤と金二色構成のマントを身に纏い、独特な杖と冠を被っている。歳結構行ってるな、そう思いつつ俺は次の言葉を待った。

「そうか、汝、名前は何と言う？」

「佐久間、敬一です……、はい」

歯切れ悪く呟くと、王様は「サクマ、か。ではサクマ、もう少し此方に寄って参れ」と笑み、手招きする。

俺は「はい」と応じてから歩み寄り、目の前で跪いた。流石に立っているのは権力の違いもあるし、悪いだろうよ、色々。

「硬くならんでも良い。では聞こう、サクマ殿」

「はい」

「汝はこの国を、いや、この世界を救ってくれるのか？」

「……」

流石に簡単には返答出来なかった。この問いこそ昨晚俺の悩みに悩んでいた問い。

簡単に頷ける物なら頷いてしまいたい。この静寂が、沈黙が痛い。俺は顔を上げ、瞳を細めてから、俯き、再び黙り込んでしまう。

こればかりはどう返答したら良いのか分からないのだ。

すると、俺の目と、王妃と思える、亜麻色のウェーブの掛かった長い髪をした、人を魅了する服に負けずとも劣らない美貌を持つ女性の隣に腰掛けている、金色の、夕日に照らされれば煌々と思える長い髪をした、黒と白二色のドレスに劣らない、美少女に確実にカテゴライズされると思える顔立ちをした姫だろうか？ 少女の碧眼が合った。

数秒の視線の交錯。

彼女は直ぐに俺を見詰めたまま柔和に微笑むと、口の動きだけで俺に何かを伝え始めた。

その言葉で俺は決意し、こう、答えた。

「はい、救います」

嗚呼、我ながら馬鹿　　そう思いつつも、俺の心の中は俺自身に賞賛を送っているようで、何処か華々しい気分になったのは、俺だけの秘密である。

第三話 第一の欠片

翌日、俺は王国の城門前にやって来ていた。

鼻孔に流れ込むのは火薬の臭いと、酷い程の腐敗臭。

頭が痛くなる程の血の臭いで一瞬嘔吐感を覚えると、1人の兵士が俺の脇を駆け抜けて行った。

何だろうか？ 急ぎの用事か何かか？

俺は踵を返し、がちやがちやと騒がしいまでに金属音を響かせながら駆け抜ける兵士の後を追った。

「へ、お城……？」

素っ頓狂な声を出す俺を他所に、兵士は数分前まで朝食を取っていた城の門番に許可を貰い、城へと駆け抜けて行ってしまふ。

「ちょ、早いなあ、もう……！」

此処で見逃したら、何だか嫌な予感がする。

見逃すわけには行かないだろうよ、理性も本能も『逃がすな』って叫んでるんだからさ。

兵士は城の門を押し開けると、そのまま一心不乱に駆け抜けて行く。

オイオイ、何を其処まで慌てるんだ？ 何かあったのか？

「て、その先は王様との謁見の間じゃなかったか……って、オイ？」

「……！」
何と兵士は王様との謁見の間を押し開けた、大変で御座います！……！」と叫んだのだ。

大変で、何が大変なのさ？ 何かあったのさ？

漸く追い付いた俺は気付かれぬように壁に背を預け、中の会話に耳だけ傾けた。

「何を騒々しい。何があった?」
王は極めて冷静に兵士に尋ねた。

次の瞬間、俺の希望は、現実には、願いは、呆気無く崩れ落ちた。

「第一代目勇者? アマガセミソギ? 様が、魔王を討ち取ったそう
御座います!?!」

「……へ?」

「な、んだと……?! それでは、あの召喚された者は ?!」
どーゆー事でしょうか?

状況を整理してみよう。

俺よりも先に勇者は1人来ていた。その勇者が魔王を倒した。俺、
還れない。

「……」

この瞬間以上に、絶望を感じた事はない。
王様との謁見の間も騒がしいよ、何だよ、何だよ何なんですか。
もう良いさ、俺引き籠もろう。

「あの勇者は偽者で御座います!?!」

「チ、イツ!! 騙されたというのか!?!」

(どうしてそうなったあああああ?!?!?!?!?!)

悪い、何がどうなってどうなった!?

俺何、偽者だったの?! 俺じゃあ何?! 一般人?!
今直ぐそれじゃあ元の世界還せやこら!?!

1人の男の甲高い声が俺の耳に響いた。

嗚呼、これが走馬灯って奴か。

嗚呼、短い人生だったな。

嗚呼、彼女欲しかった。

嗚呼、親孝行してないわ。

嗚呼、妹、元気かなあ……。

嗚呼、此処で終わりか、まだやってないのになあ。

嗚呼、空が青いなあ……。

嗚呼、 、 実に、馬鹿げた話だ。

グゾツ！！！

腹に感じる冷たい、それこそドライアイスをそのまま腹に押し当てられた様な感覚。

痛みを超え、激痛を超え、痛覚は麻痺。

視界が明滅する。

意識が混濁する。

記憶が朧になる。

感覚が麻痺する。

これはもう死の前触れか？

或いはもう死んだのか？

いや、生きている。

手は握れる。

足は動く。

喋れる、血を吐ける。

見得る、考えられる、思える、悩める。

俺は腹に突き刺さる槍の矛先を掴み、口元に零れる鮮血を拭って

から紡いだ。

「オイこら……、痛えじゃねえか、オイ……、死んだらどうするつもりだったんですか、責任取れるんですか……？」

俺の言葉に慌て、驚き、慄き体を引く兵士達。しかし、リーダー的存在な兵士はそうは行かず、足を震わせながら、叫んだ。

「な、何故……、み、皆の者……！ 一斉に攻撃せよ……！ 喋る隙を与えるな……！ 反撃させるな……！」

『おおおおおおおおお……！』

再び繰る槍や剣。

轟音や金属音を響かせて、刃は矛先は俺へと迫る。これだけ喰らうと死ぬかもな……、ならどうする。防ぐ。どうやって、何かで。

俺は何を求めている。

俺は何を欲している。

俺は何が欲しいんだ？

俺は。

「阿吽……?!」

直後、俺の中で何かが弾けた。

掴めた 俺はこれを欲していたのか。

俺は頭を振ってから、思い切り踏み込んだ。

同時、震脚（ふゆあし）と言（い）うべきか、足の振動と声の音量により、兵士達の刃は俺に直撃寸前で逸れ、或いは止まり、或いは引き、皆1度退いた。

「……分かって来た、これが俺の求めていた、欲した？モノ？か」

「何をゴチャゴチャと……ッ！！」

「だがまだ足りないな……、どうした？ 来いよ、お前達で試したい」

「嘗めるなああああああああつあああ！！！！！！」

雄叫びを上げ、1人の兵士は一直線に俺の首を薙いだ が、薙
がれる前に俺は体を屈める。

俺もまた。

兵士の首目掛け、右拳を握り締め、思い切りアッパーを叩き込む。
吹き飛ばされた兵士の首は、周囲の兵士がおのおの程、有り得ない方
向に曲がっていた。

「俺の力は 創造し想像する力。今のは想像通り」

俺はゆらりと兵士達を指差し、告げた。

狂乱の宴が始まる前の、誘い文句として、今此処で 。

「遺書は書いたか……？」

第四話 異質なる異形、そして終焉

轟音轟音轟音。

激音激音激音。

爆音爆音爆音。

澄み渡る、それこそ甘美な響きにも似た金属音が、その空間を支配した。

「馬鹿な……、偽りの勇者が、何故、此処まで　　ッ!」

鮮烈な、強烈な音が支配する空間で、紫色の装備を身に纏う、リダー的存在の兵士が吼えた。

崩れ落ちる壁、立ち込める黒煙、鼻孔に流れ込む白煙は涙を誘う。時折香る異臭は、赤絨毯が焼けた際の臭いや、人の死臭にあるのだろう。

死臭程、胸糞悪い物は無い。

死臭程、人の感情を掻き乱す物は無い。

俺はやれやれと肩を竦めてから、紫色の装備を身に纏う男に告げた。

「止めないか？」

「な、に……?」

怪訝な色を浮かべる紫色の装備を身に纏う男に、俺は溜め息を吐いて「これ以上無意味に命を奪い合っても無駄なだけだろう?」と尋ねた。

応答を待つ。

数秒の静寂と、沈黙の後、紫色の装備を身に纏う男は持っていた

剣を下ろし「良いだろう、俺もそう思っていた」と笑う。

視線が交錯し、再び静寂と沈黙が支配すれば、俺も笑い「そうか」とだけ告げて、男に背を向ける。

これで終わったか。

これで俺も。

これで。

ドツ、ツズツツツツ！！！！

「甘いんだよ、偽者野郎が　　ツツ！！！！！！」

何かが、俺の背中に、突き刺さった。

痛い、痛い、痛い　　！！

何が、何が、何が　　！！

「ハ、ハハハツ！！！！　所詮は偽者！！　　鍍金メッキの勇者でしかないんだよ！！！！」

男の高笑い。

兵士達の男を褒め称える声。

鍍金の勇者……？

膝から崩れ落ちる俺の肉体。

所詮偽者……？

壊れる、墜ちる、墮ちる、崩れる、消える　　！！！！

いや、終われない。

此処では、終われない。

まだ俺は、終われない。

死ねない、壊れられない、落ちられない、消えられない、崩れら

れない。

終われない、終われない、終焉れない。

ドクンッ！！

一際高く、心臓が鳴った。

心音は徐々に高鳴り、嗚呼、この先、こんな事がまた起こるのだ
としたら。

「俺が 止めなきゃならないよな……」

空気が一変した。

兵士達の背中に冷たい物が走った。

兵士達の目に映ったのは、きつと『死んだハズ』の俺。しかし、
今の俺はその死を微塵にも疑わせない。

兵士達は俺の声に身を竦ませ、一瞬震え上がったから、視線を俺
へと向けた。

皆目を剥き、わなわなと口を震わせている。

俺は流れ続ける鮮血に、死を覚悟してから、囁いた。

「俺の求めていた答え、欲した物が今、俺の手の中にある」

「な、ぜ……、何故だ、何故だ、何故貴様は生きている?! 俺が
殺したハズ ……!!」

狼狽した兵士は、俺を指差して叫んだ。

「観察不足、だな……。俺はまだ 殺されちゃあ、居ない……」

「馬鹿な……、馬鹿な馬鹿な馬鹿な馬鹿な……!! ぶざけるオッ

!!……!!」

男の苛立ちに応え、兵士がその持っていた剣や槍を振るう。轟ッ
！！　と言う凄まじい空気を貫く音と同時に剣と槍が俺に迫る。

「参考にさせて貰ったが……、二度は無い」

俺はそれに動じず、拳で応じる。

刃を横に交わす事で避け、次いで迫る剣による突きを屈んでに避け、突いて来る槍に齒向かう形で駆け寄り、紙一重で避ける。

「な、ツッ!？」

「き、様ツア!！」

顔を驚愕の色に歪めれば、武器を引っ込めようとする。

その前に俺は兵士の顔面に右拳、もう1人の兵士の顎に思い切り唸りを上げる豪速のアップアを叩き込む。

鎧を纏っている兵士達の方が上なのに、俺の拳だけ兵士達の鼻や顎に直撃し、苦も無く吹っ飛ばされた。そのまま起き上がる様子はない。

「はあ……?」

男が呆けた声を出す横で、俺は唯純粹に拳をしげしげと見詰めていた。

「分かって来た……、これで終わりにしよう　今こそ見せよう、俺の欲した求めた力の実体を」

肩を跳ねさせる男に俺はそう告げてから、唱えるべき吟ずるべき言葉を口から漏らした。

「虚空を彷徨う箱より出でる破滅の力よ、天を覆い、地を焼き払う
悪魔の力よ。我が手中に曝け出せ　?害為す魔劍^{レイヴァー}?

その日、国はその有様を変えた。

敬一は厳かに、詩を吟ずるような声でその場全員に告げた。

「？ 跪け？」

キュツ、ゴツツ。

強烈な光。

鮮烈な煌。

空気は凝縮され、圧迫され、一点に集中する。

全てを薙ぎ払い、全てを破壊し、全てを破滅へと導く、危険へと誘う力が、天へと解放され、大地へと流れ出る。

悲鳴、

断末魔の叫び声、

絶叫、

嘆き、

怨嗟、

阿鼻叫喚、

轟音、

激音、

爆音。

全てが終わりに、

終焉がその場に訪れた時、

エルクバルズと言う国は地図上からも、また、世界からも、姿を消したのだった。

第五話 成れの果てと現在の勇者（前書き）

これにて第一章終了です。

如何でしたでしょうか？

それではどうぞ！

枯れた。

敬一は重力に身を任せ、そのまま荒れ廃れた砂の地面に身を投げ出す。

「……あ、ぐ……、ツ、は……あ」

肩が揺れる度に、胸が競り上がり、口から息が漏れる。

吐く度に香るその血を香りは、鼻を塞ぎたくなる程の物。

倒れた衝撃で、腹の中身が若干外に飛び出してしまっている。

身に纏っている、学生服も破れ、千切れ　ボロ雑巾の様になっている。

致死的傷の量、死ぬとすれば死因は多量出血。

闇夜の空の如く黒い長い、肩くらいまである髪も紅と灰に汚れ、

幼さを残すその顔もまた血化粧ちげしやうが成されている。

嗚呼　俺、死ぬんだな。

其処で彼は自覚する。

後悔は　ある。

後悔しているからこそ、笑ってしまう。

後悔しているからこそ、言葉が思い浮かばない。

嗚呼　皆、悪い。

嗚呼　御免、もう、止められないみたいだ。

それが一番の後悔。

「……俺は、無能、か……」

オマエハ、ムノウダ。

「俺は……、約束すら、護れない、のか……」

オマエモ、ウラギリモノジャナイカ。

「俺は」

オマエジャダレモマモレナイ。

刹那、その言葉が俺の脳裏を過ぎった。
ビクンツと、彼の体が震える。

「ア、……ああ、……」

全身が痙攣し、声が震える。
背筋に悪寒が走る。

オマエハ、アクマダ。

コノ、ヒトゴロシメガ。

「嗚呼アアア嗚呼ああああああアアアアアああああああああ
あああああああああああツツツツ！！！！！！」

獣の如き、絶叫。

阿鼻叫喚の如き、狂った叫び声が空を劈いた。

空は、大地は何も応えてはくれない。

ユメジャナイゾ？

ウソジャナイゾ？

「じゃあ、僕が君を助けて上げるよ」

誰だ。

誰だ。

怖い。

敵？

殺られる。

「大丈夫だよ、僕は敵じゃない。でも、味方でもない。唯のお節介
さ」

心の中の陽炎が晴れて行く。

目の前が霞み、意識が朦朧とする。

記憶が断片的に崩れ、呼吸も荒れる。

「あーあ、こんなになっちゃって……。でも、理解したよ。
君の能力は僕の能力と似てるみたいだ 勿論、×××としてね」

何を、言っているのか分からない。

一体何者。

「君に良い物を上げるよ。」

「君が本当に必要になった時だけ外すと良い」

其処で彼の意識は、途切れた。

暗い暗い、深淵の底に……。

「……………」

夢を見ていた。

長い長い、俺がこの世界に来て、間も無い頃の夢を。

あの頃は馬鹿で、直情的で、無鉄砲で、非常識で。

現実逃避ばかりしてたなあ……、我ながら馬鹿らしくて仕方が無い。

あの一国消滅事件から四日。

俺は近くを通り掛ったトリエニスタ皇国の人間に拾われ、一命を取り留めた。

だが、俺に今、視力は無い。

視力を失った、失明と言う訳ではない。

俺を救ってくれた、誰かによって目を覆う様にして巻かれた黒い布。

意図的に巻かれたであろうその布により、俺は今、視力がないに等しい状態となっている。

しかし、慣れれば楽な物で、音と臭い、声と気配を探れば避けられるし、物を拾う事も出来る。

この布は外れない。

外れないが、感じられる。

感じ取れる。

感じ取れるからこそ、今がある。

感じ取れるからこそ、生きていると実感出来る。

今があるからこそ、生きていると実感出来るからこそ、俺は言える。

「俺はこの国の力になります　それが例え、戦争であったとしても……」

もう二度と、あんな事は経験したくないから……。

だから俺は 戦う。
戦って、闘って 果てを見る。

成れの果てが終焉ならば、その終焉が起ころぬ様に俺が食い止める。

食い止めて、護り抜いてみせる。

この、命に代えてでも 。

俺の宣言から数秒後、王の間で静かな喝采が上がったのは、言うまでも無い事である。

第六話 食事から始まる決闘話

朝の空を超高速機動型飛空艇が雲を引き裂いて飛び去って行く。

その様子を与えられた部屋の中から見ていた俺は、いつか乗ってみたいと言う好奇心と、ゼロ戦みたいだなと言う日本の戦闘機に思いを馳せていたのだった。

東からの朝日を全身に受ける四隻の艦隊は、どれも300年と言う長い歴史を誇る皇国、トリエニスタ皇国を見守る為に今日も上空を彷徨っている。

「ホント……、嚴重だよな、戦争撲滅とか言ってる癖に」

艦隊に向けて吐き捨ててから、俺は再び天蓋付きのベッドに腰掛けた。

長い乱世を潜り抜けて来たトリエニスタ皇国は、戦争撲滅を主に『戦争根絶』を掲げ、日夜努力しているとの事だが、実質あのよう
に早朝から空を艦隊が支配していれば、本当に貴様等戦争根絶する気はあるのかと疑ってしまう。

勿論、信じてはいるのだが、信じてはいるのだが……。

俺は深い溜め息を吐いてから、そのままベッドに寝転がった。

「サクマ様、朝食の準備が出来ました」

俺は、寝転がったまま呼ぶ声に上半身を起こした。

「サクマ様、朝食の準備が出来ました」

「あ、了解 先行っててくれる？」

腰を上げて、黒いジャケットを手中に具現化すれば、それをシャツの上から纏う。

「そうは行きません。朝食は必ず皆で取る、と言うのがこの城に住

まう者達の仕来りですのぞ」

「それは良い仕来りだ。だけど俺にも準備があるからさ」

うんうん、朝食は皆で。確かに良い仕来りだけどね、こっちの都合も考えて欲しい、本当に。

「それではお待ちしております。では」

扉の向こうから声がしないのを知れば、俺は腕時計と、ネクタイを具現化し装着して行く。

何処ぞの葬式の帰りだと思われる格好をすれば、そう思われぬ様に、シャツを肌蹴させ、シルバークロスが特徴的なネックレスを首に掛ける。

一般的高校生は絶対にしないであろう格好の完成だ。

絶対にしないであろう格好なのだぞ、

「……、スーツ初めて着たけど……、悪くないな」

姿鏡の前で俺は自分の格好に頷いてから、苦笑した。

後頭部をポリポリと搔いて、俺は私室の扉を見詰め、嘆息する。

「待たせちゃ悪いし、行きますか」

そして俺は、私室を後にしたのだった。

スーツ姿の敬一は、長い赤絨毯の敷かれた廊下を抜け、少々迷いながら漸く到達した。

広過ぎる……。

溜め息を吐いて、冷え切った指先を温める為にポケットに突っ込む。

大食堂の扉を観音開きに開ければ、騒々しくもあり、また楽しそうでもある声が敬一の耳に飛び込んで来た。

「おお、ケイイチ殿。待っておったぞ」

唸然としていた敬一に、トリエニスタ皇国国王は声を掛けた。

「待たせてしまった様で……、申し訳御座いません」

小さく頭を下げる敬一に、国王は「何の、構わないぞ」と傲慢とも思えるその白い顎ヒゲを撫でた。

「それなら良かったです」

安堵する敬一を促す様に、王は己の向かいの席を指差し「座りなされ、少し話もしたい」と告げた。

そのブルーグレーの煌きを持つ瞳は真剣その物。

彼は頷いて「分かりました」と呟いてから、王の目の前に腰を下ろした。

正直言ってしまうえば、これ程までに息苦しい物はない。

目の前には王様と王妃様、そしてその隣には御姫様。俺の右隣には淡い紫色混じりに銀色の長い髪をした、それこそラピスラズリにも勝るとも劣らない紫色の輝きを持つ瞳をしたメイドさんが居る。

確実に美少女にカテゴライズされるであろうメイドさんは俺にその瞳を向けてから小さく微笑んだ。

俺は微笑み返してから「それで、お話とは？」と差し出されたスープを口に運びながら、目の前で同じくスープを口に運ぶ王に尋ね掛けた。

王はうむと頷いてから「まずは尋ねたい。汝の真名と、出身場所を」 Spoon を止め、俺を見据える。

真名？ 俺は首を心の中で傾げてから、取り敢えず応えられる範囲を応える事にした。

「佐久間敬一、出身は日本、しがない普通で健全な学生で御座います」

俺の応えに同じく食事をしていたメイドさんや騎士達がどよめき、囁き合う。

すいませんね、普通で。

肩を落としてから溜め息を吐く俺に王は「サクマ、ケイイチか。良い名じゃ」と微笑み「次の問いじゃが、その目を覆う布は一体？」と俺の目を覆う黒き布に興味を持った。

「これは……、俺の命を救ってくれた誰かが俺に与えてくれた、枷です」

「枷、とな？」

「はい」俺は頷いて、布に触れてから「これは俺の意志では外せません。幾ら斬られようと、殴られようと、撃たれ様と、破れる事はありませんし、解ける事もない不可思議な布です」と続けた。

王は「何かしら、封印の魔法でも掛けられておるのじゃろうか」と疑問の声を漏らしてから、周囲のメイドさんや騎士達の囁きに耳を傾け始めた。

「不可思議な布な……、剥がしてみたいぜ」

「私はあの布を一部で良いから貰いたいわ」

「てか闘ってみたくねえ？」

「おお、言ってる」

途中から既に布ではなく、俺との戦闘についてで盛り上がり始めている。

溜め息を吐く王に俺は苦笑してから「ちなみに俺の能力ですが」と続けた。

「能力、とな……？」

「はい、魔法とは違う、異質異端なる力で御座います」と俺は続け「詳しくは分かりません 唯、俺の力は物を創造する事です」と頷いた。

再び騎士達がざわめいた。お前等と突っ込みたいね、本当に。

「我々の知る具現術とはまた違うのだな？」

「ええ、全く。服も具現化出来れば、時計や、武器まで創造出来ますから」

まああの『害為す魔剣』を創造して以来、全く使っていないから分

からないんだけどさ……。
すると。

「なら、我が国では精鋭とも言える騎士団のトップ、騎士団長と戦ってみると良いじゃろう。それで実力も分かる」

と、とんでもない事を言い出したのだ。

時間が止まった気がした。

数秒後、わっと上がる歓声と、やべえ見てえと言った好奇心の聲が大食堂に響き渡った。

コイツ等、絶対今の状況楽しんでるだろ……。

改めて、俺はスープを啜り、その暖かさに溜め息を吐くのだった。

第七話 魔眼とメイドと現実逃避

広い夜。

見渡す限りの草原の中で、少年はぼんやりと月を見ていた。

周りには誰も居ない、人の気配も無ければ獣の息遣いも皆無だ。

此処数日、無理をしたせいだ。体が重い、傷口も中々塞がらない。

いや 俺は何をしている？

ふと、疑問が過ぎった。

此処は 何処だ？

何故俺は 此処に居る？

疑問に疑問が重なり消滅する。

真紅の空気を打ち消す様に蒼い月の光が少年を照らす。

「やあ、少年。また出逢ったね」

声が聞こえる。

聞き覚えのある声。

「僕の名前は だよ。」

此処は君がもし、その魔の瞳に布を巻いていなかったらと言っ
仮定で創られた世界」

何を言っているのだろうか？

魔の瞳？

創られた世界？

「まあ夢みたいな感じだよ。直ぐに覚めるぞ」

夢なのか、これは。

夢なら、良い。

「それじゃあね、少年。また逢えたら逢おう、君とは何故だか心が通じ合える気がしてね」

意識が闇に沈む中で、少年は最後の通じ合えると言つ言葉に嘲笑を浮かべて。

「……………」

其処で俺は目を覚ました。

夢、だったのか……………」

それにしても……………」

「あの人は……………」誰なんだ……………」

食後、決闘するか否かと言つ話を無理矢理切り上げて来た俺は、そのまま眠ってしまったらしい。

額に手を当てて、目を覚ます様に頭を振つた俺は、正面へと視線を移して。

「お早う御座います、ご主人様」

メイドさんと目が合った。

「……、幾つか聞いても良いですか？」

「はい、何でしょう？」

俺の目を見詰める彼女に首を傾げて、俺は「何でそんなに顔近いですか？」と尋ねた。

「はい」彼女は頷いてから「この方がご主人様の顔が良く見えるので……」と自ら言っつて頬を染め、自爆していた。

「そ、そうですね……、あ、貴方のお名前は……？」

合コンかよ、そう我ながらそうツツコミたい気分である。

「はい、私はエルシア、？エルシア＝エルキュアーゼ？で御座います。以後、お見知り置きを」

「あ、はい。宜しくお願い致します」

小さく会釈する俺に、エルシアは顔の前で手を横に振ってから苦笑を零して「そんなに畏まらないで下さい」と続けた後で「な、何か飲み物でも」と微笑んだ。

「あ、そうですね……、そうだな、なら紅茶、貰えますか？」

いや、何となく紅茶にしてみたんだが……、紅茶、あるのかね？

「紅茶ですね、分かりました」

「あ、有難う御座います」

あつたね、紅茶。よし、これでレパートリーが増えた。

これからは紅茶を主力に他の料理とか飲み物を頼んで模索してみよう。

数分後、エルシアは仄かに良い香りの香る紅茶の入ったティーカップをトレーの上に乗せて俺の目の前にやって来た。

「どうぞ」

「ん、有難う御座います」

受け取り、暖かな紅茶を口に流し込み、喉を潤すと「で、エルシ

アさんは何故此処に？」と尋ねる。

「はい、私はご主人様専属のメイドですので」

「へえ、専属の……、って……、専属？」

「はい」満面の笑みを浮かべてから「も、勿論メイドですよ？ メイドの仕事ですからね？ で、ですが……、ご主人様が望むなら、その……」と何やら口籠っていた。

何となーくだが予想の付いた俺は溜め息を吐いてから、再び紅茶を口に流し込み喉を潤してほっとしてから「大丈夫、其処まで俺は貪欲じゃないから」と苦笑した。

エリシアは俺の言葉に俯いて顔を熟れた林檎の如く真っ赤にしてから、コクリと小さく頷いていた。

「そうだ、エリシアさん」

「はい、何でしょう？」

「少し聞きたい事があるんだ」

首を傾げる彼女に俺は「この国の事、少し教えて貰えないかな？」と聞いた。

エリシアは「そんな事で良ければ」と微笑み頷いてから「此処、トリエニスタ皇国は歴史としては300年の長い歴史を誇る国でもあります」と綴り出す

トリエニスタ皇国。

750000平方km、人口は3000万人、何れにせよおよその数だが、それでもオーストラリアに並ぶ大きさである。

300年と言う莫大な歴史を誇り、？黒獅白鷲戦争？の表舞台でも活躍したとされる各国の1つでもある。

魔法が主力で、何をやる際にも全て魔力を必要とし、物を動かす

際にも、電気を使う際にも、炎を使う際にも、水を使う際にも全て魔力が原動力とされている。

有名なのは天を舞うあの艦隊だろう。あれは通称？^{エル・デ}煌きの剣戟^{ライト}？騎士団の所持する艦隊であり、硬化の魔力の注がれ含まれた装甲を使用し、それでいて柔軟性と地上砲台程度ではビクともしないキリエスト鉱石をふんだんに使った装甲がその上から使用されている為、防御面ではこの簡単に勝る艦隊は中々居ないだろう。更には砲台やバルカン砲と言った数々の装備が纏わり付いているので攻撃面も相当地な物と言える。

冒険者達が多いこの国は、冒険者達の為の宿所や、ギルドが存在し、この国に滞在しつつ依頼をこなせる様になっている。

鍛冶屋^{メイスナー}と呼ばれる武器や防具を鍛える者達も多く存在し、それぞれが店を経営していると言っ。

まあ全てエリシア受け売りの情報なのだが、これがこの皇国の全てだ。奴隷制度も撤廃され、国の人種種族差別も無く、理想の国家と言っべき国らしい。

「成程ねえ……、説明有難うね？」

俺はメモ出来る範囲をメモしながら、彼女を見詰めてお礼を言う。彼女は「いえいえ」と微笑んでから「これ位、この城のメイドとしては許容範囲ですので」紅茶を口に流し込んでいた。

許容範囲か、これが……。いつか俺も説明しなきゃならない日が来るのかね？

やれやれ、俺は肩を竦めてからエリシアに「どうかしたんですか？」と尋ねられたので「いや、何でもないよ」と続けて、後から敬語を忘れていた事に気付き、額に手を当てた。

「それにしても……」

額から手を離し、俺は目の前で優雅に紅茶を飲むエリシアに目をやってから、此方に視線を向ける彼女に素直な感想を漏らした。

「エリシアさんって……、綺麗ですよ」

刹那、ブハツと紅茶を吹き出すエリシアに俺は驚き「な！？ 何

が、クソ、新手の奇襲か?!」と叫んでいた。

「い、いえ、何でも、ありませんよ、はい……」

俺の肩を掴んで、俯く彼女に俺は「そうですか?」と首を傾げて、なら良いですがと続けてから、無理はしないで下さいね?と告げて、その淡い紫色混じりの銀色の髪を梳く様に撫でてやった。

うわ、さらっさらだよ……、良いなあ、こっ言う髪。

撫でながら俺は己の髪と比較して、溜め息を吐く。

俺の髪は言って置くが確かにストレートだが、濡れると伸びてパーマが掛かる。まあこれで分かるようにストレートとは言え、癖毛があると言つ事になるのだ。

故に、指で梳こうとすると、時折絡んで仕方が無い。そうなるとうん、痛くて困るのだよ、うん。

と、其処でエリシアが声を上げていた事に気付いた。

「あの、その、う……、そろそろ、仕事に、戻りたいの、ですが……」

「あ、嗚呼、申し訳ないです。つい髪が綺麗な物で、では、お仕事、頑張つて下さい」

彼女の髪から手を離す。手に残る感触が名残惜しい程に彼女の髪に触れるのを求めている気がした。

頬を朱色に、それこそ熟れた林檎やさくらんぼの如く染める彼女に、何でそんなに顔を真っ赤にしているのかと悩みつつ、立ち上がり、そそくさと去る彼女の背中を見送った。

ふむ、何であんなに慌てるのか。何か俺、嫌な事、したかね?

それなら謝らんなあ……、つて、へ? この鈍感がつて? いやいや、誰が鈍感だよ、誰が。

じゃあ朴念仁って誰が朴念仁だよ。違うだろうよ、俺は鈍感でも朴念仁でもないぞ?

て、待てよ、痛い子を見る目線で俺を見るなよ、俺が何したよ、オイ。

ふう、と一息してから、俺はベッドに再び寝転んで、

「勇者サクマと騎士団長との決闘が決定したってよ!!」

「嘘、やべえ、先行って良い席取るうぜ!!」

「あ、私のも!!」

「私のも取っというてよう!!」

現実逃避したくなった。

あるえ……、可笑しいなあ、可笑しいなあ、可笑しい、なあ？

決闘するか否かの話は、あの、その、断った、ハズ、なんだけどなあ？　なあ……。

布団をかぶり、完全現実逃避体勢をしていた俺を、嫌な予感が再び貫き、緊張の糸を再び張り巡らせるのは、神様だろうか？

それなら神様を殴ってやりたい。改めてそう思った、俺だった。

第八話 負けられない理由と騎士団長

心。

人には心がある。

心と言うのは、厄介な物で、簡単に人を乱してしまう。

心と言うのは、脆弱な物で、簡単に壊れてしまう。

心と言うのは、大切な物で、重くて、暖かい。

もし、人に心がなかったら、どうなっていただろうか？

殺し合いの毎日？

戦争の毎日？

きつと、血で血を洗う様な事しかなかった事だろう。

そう思うと、神様は良い事をしたな、と思う。

無神論者である俺でさえ、頷けてしまう程に。

神様を信じていない奴の所に、心はあるのだろうか？

神様を居ないと思っっている奴の所に、思いはあるのだろうか？

俺には 心、あるんだろうか？

三ヶ月前に新たに開通したと言う西区に建っていたのは、円形闘コロ技場テヤを思わせる建造物だった。名前は『ティニアス』。それがこの闘技場の名前らしい。既に多くの商人や剣闘士達が乗り込み、参加するか否か、或いは参加しないまでも観戦はしたいと言う見物人も詰め掛けて大変な活気を呈している。それに付け加えて今日は俺と

騎士団長の試合と言う稀に見るイベントが開かれると言う事もあり、剣と槍を対峙する様にして構え合う鎧を纏った男達の石像の特別製とも思える門は朝からひっきりなしに訪問者の群を吐き出し続けた。

円形闘技場の周辺にはまるでお祭りとも言う様に屋台が立ち並び、商人達は此処でやらずしていつやるとも言う様に売れる物を売り捌いている。円形闘技場を覆う様に設計された広い水路は色取り取りなまでの華々が咲き誇り、綺麗だったのだが。

「これはどう言う事だ……？」

「さ、さあ……、私にも、分からぬ」

円形闘技場前には姫様と一緒に居た俺は啞然として尋ねて見た。

「何だ、俺に恨みでも有るのか？ てか誰が決闘する何て言った？」

「妾は知らぬぞ?! そ、そもそも決闘するか否かと言う話は父上と母上が勝手に」「あー、もう良い。言わないでくれ、鬱になる」「鬱、とな……?」

溜め息を吐く俺に、隣で首を小さく傾げる姫様 ミアーシャルドリアクティアトリエニスタ姫は、俺の服の裾を掴んで引っ張っては「う、鬱って何じゃ?」と聞いて来る。

「んー、鬱って言うのは、……何だろう、一言で言っちゃえば気分が悪くなる事、かな?」

苦笑しては告げる。実際鬱病を説明してくれて言われたって俺は専門医じゃないんだから無理だよ、うん。

「そ、それは、大丈夫、なのか……?」

心配そうに俺の服をきゅっと掴み握り締める彼女に俺は微笑んで「まあ何とかなるさケセラセラだよ」と、その金色の長い髪を梳く様に撫でてやる。

「む、う……、なら良いのだが」

「大丈夫大丈夫。それじゃあ行こうかね」

頭を撫でる手を離してから、俺は彼女に手を差し伸べる。

「ん?」

「ん、それじゃあ手、拝借致しますよ？ 御姫様」

我ながら気障な臭い台詞を言ってから、彼女の手を取り、握ってやる。

迷子になられても困るじゃない？

「ま、待ってくれ！ け、ケイイチ、そ、そもそも、何処に行くの、じゃ？」

手を握られれば、顔を熟れた林檎の様に真っ赤に染める彼女の言葉に「あ」と気付いてから、左手を顎に手そ添えて「取り敢えず、待合室じゃね？」と頷いてから、彼女の手を握ったまま歩み始めるのだった。

へ？ 恥ずかしくないのかって？

全然。

控え室は闘技場に面した小さな部屋だった。俺達は結局受け付けの女性に導かれ、此処まで来たのだった。その後女性は、で、ではと続けて去ってしまった。もうツツコム気すら起きない。既に観客は満員、控え室にもその轟音染みた声援が届いて来る。

「……はあ」

「だ、大丈夫かの……、ケイイチ」

木製の古惚けた椅子に腰掛ける俺に、隣に腰掛けている姫様が首を傾げて来る。

「嗚呼、大丈夫 それじゃあ……、行つて来る」

「う、うむ そ、そうじゃ、ケイイチッ」

立ち上がる俺に、姫様は何か気付いた様と同じく立ち上がり、

「必ず勝って見せよ　これは姫としての命じゃ」

と、凜とした声で告げて来た。

数秒の沈黙と静寂が部屋を支配し、

「承りました　我が姫」

俺は胸に拳を当てて、頭を下げるのだった。

やれやれ　これじゃあ負けられないじゃないか……、全く。

遠来の様な歓声に混じって、敬一は場内に足を踏み入れた。

同時に腹の底から響く様な、心が震え上がる様な歓声がその場を満たした。

敬一は一瞬ビクツとしてから、その新たに顕現したコートを纏い、ネクタイを緩め、外してから、投げ捨てた。

「良くぞ参ったな……、勇者殿」

対峙するのは黒き鎧纏いし男。

深淵の闇の如き色合いを持つ完全装備の甲冑は、兜まで被れば、洋館や美術展に飾られている甲冑と思われる程立派だった。

手に持っているのは見た所、両刃の剣と盾。盾も大きく、十字の塔盾タワーシールドと踏める。

「俺は勇者じゃあないさ　もし勇者だって言うのなら、出来損ないだよ」

対して敬一は未だに瞳を黒き布で隠しながら、片手に短刀を具現化する。

リーチ、攻撃力、防御面は全て負けているだろうが　勝ち目は？

「両者　向かい合って、　これより、勇者？サクマ「ケイイチ？様と、煌^{エル・デ}きの剣戟^{ライト}騎士団騎士団長？ヒエニス「イスターリシユポーン？様の試合を始めます」

「出来損ないでも、勇者は勇者だ　此処からは試合、手を抜く等と言う考えは棄てよ　全力でぶつかって参れ」

言つと、ヒエニスと言う騎士団長は、銀色に近い瞳を俺に向け、全身から気合を迸^{はきほし}らせていた。思わず敬一は気圧され、後退しそうになるも、齒を食い縛り、応える。

「最初からそのつもりさ　こんな良い舞台を用意してくれたんだ、応えないと不味いしな」

肩を竦めては、笑みを消し、敬一もまた全身から気合と迸らせた。

直後　、

「試合　始め！！！」

火蓋は切り落とされた。

第九話 魔眼解放、初作品は究極速度の産物

静かな空間。

一瞬足りとも目は離せない。

静寂、何時の間にか歓声も止んでいる。

一瞬足りとも 気は引けない。

刹那、二人の体が宙から離れた。

俺は沈み込んだ体勢から一気に飛び出し、地面擦れ擦れを滑空する様に突き進む。

ヒエニスの刃が見えると同時に俺は短刀を振り上げ、重ね合わせれば、火花が散るのも関わらず、薙ぎ払う様にして両刃剣を押し返す。しかし、塔盾によって押し返すもその先で防がれ迎撃される。

流石と言うべきか、それとも怖いと言うべきか。

不意に思考を巡らせたのが命取り 俺の短刀は弾き飛ばされ、

両刃剣が俺の首に迫っていた。

「ツツツ　　！！！」

俺はそれを屈んで避ければ、消え去る短刀を見送り、今度は左手に片刃の直剣を具現化する。

次の攻撃に備え、距離を取ろうとした俺の耳に飛び込んで来たのは、轟ッ、と言う唸る音。それは頭上で響く様に鳴り響けば、両刃の剣は今度俺の頭蓋へと舞い込む が、俺はそれを直剣で受け止め、

「お、おおおおおっ！！！！」

「ツ、ツツ、おおおおお！！！！」

激しく火花を散らしながら、獣の如く吼え、瞬間、お互いに笑みを浮かべ、武器を弾き合ってから距離を取った。

滴る汗に気も留めず、俺は再び重臣を落とす、一気に地面を蹴る。

ヒエニスもまた、重々しい金属音を響かせながら俺に一直線に駆け寄って来ては「は、アアッ！」と言う気合の籠った掛け声と共にその鋭い唸る音を上げながら向かう突きを放って来たのだ。

俺は咄嗟に直剣の横の腹で防御し、折角駆け寄ったと言うのに激しい衝撃が体を叩き、再び吹き飛ばされてしまう。壁に直撃だけは避けたかった故、直剣を地面に突き刺して転倒を防ぎ、空中で体を翻せば着地する。

今度は疲れの汗ではなく、冷汗が頬を伝った。不味かった、あれは　喰らえば即、死んでいただろう……、容赦ないな、ヒエニスさんよ……。体の軽さで此方の方が有利と踏んでいたが、これは予想外……、流石場慣れしてるよな……、相手が騎士団長だと言う事をサツパリ忘れていたよ……。

ヒエニスは俺に立ち直る余裕を与えまいと、最後一気に駆け寄り距離を詰めてから、勢いと速度を乗せた一撃を見舞って来る。ヒュ、轟ッ！！　と言う音が俺の耳を劈いた。

俺はその一撃を直剣で受け止め　ず、そのまま体を横に逸らし、回避行動をしてから、反撃と言う様に、ヒエニスに突きの一撃を返した。

「な、ツ、ツ、ぐ、う！！」

惜しくも突きはヒエニスの鎧の肩に直撃し、激しい火花と金属音を散らし響かせながら抜けた。直剣をすぐさま引き、ヒエニスとの背に向け駆け出し、距離を取った。

「流石ではないか　勇者殿」

「アンタこそ　流石騎士団長だぜ」

言いながら、俺は地を蹴った。ヒエニスも剣を構え直して間合いを詰めて来る。

一撃一撃と見舞われる攻撃を捌き、弾く俺。二人の周囲では色取り取りの色彩が飛び散り、衝激音が闘技場の地面を突き抜けて行く。歓声にも負けずとも劣らない激音と轟音の接戦の中で　その時は訪れた。

「しま　　！！」

俺の直剣が、ヒエニスの左の肩を覆う鎧に直撃し、抜け

「貰ったぞ　　勇者殿！！！！」

ヒエニスの突きが俺の顔面へと迫り

「や、らせるか、よ、オツツ！！」

何かが舞い飛んだ。

それは、俺の目を覆う布。

咄嗟に顔を背ける事で一撃を回避したのは良いが、その時切っ先が布に引っ掛かり、引き裂いてしまったのだろう。

「……あ」

見得る　　視得る　　診得る　　観得る。

色が、人が、声が、風が、砂が、空が、雲が、観客が、俺が、武器が、太陽が　　。

「お前も　　見得た」

瞳をヒエニスに向け、宣戦布告する様に告げる。

俺の瞳を見たヒエニスは一瞬怯み、言葉に笑みを浮かべたが、直ぐに笑みを消し、距離を詰め

「ならば応えよう　　何が見得た、青年の目に！！！！」

吼えた。

同時　　ヒュオツ、轟ッ！！！！

今までにない轟音と激音による一撃が俺に放たれた。

次の瞬間、観客は何が起こったのか、説明も付かないような状況に陥る事となる。

「もう全て知った」

それはまるで死刑宣告。

敬一はその紫色と藍色の瞳を開き、両手に直剣を具現化すれば、その一撃に応酬した。二刀を交差して一撃を防御すれば、それを弾き飛ばし、右、左と言った奔流の如き連撃を開始する。それは高速、敬一自身、何故こんなにも動けるのか分からない。剣道をやっていたわけでもなければ、武道をやっていたわけでもないのに　　これが勇者補正か？　そう思いつつ、攻撃のギアを上げて行つた。

ヒエニスは今までにない攻撃に驚き躊躇い、攻撃を弾き落とす、捌きながら呆気にとられていた。

今までののは遊びだったと言うのか？　違う。

今までののは目が　　そうか、今までは視力を失っていた同然だったから攻撃速度、反応速度が遅かったのか　　！！　　ヒエニスは悟つてから全身を包む法悦感に笑みを浮かべた。

超高速での両者の応酬が始まる。右左と舞う様に迫り、舞い込み、

見舞われる敬一の斬撃を、ヒエニスは次々と弾き落とし、捌きながら、返す様に時折突きを繰り出す。両者の武器は既に酷い刃こぼれを起こし、かなきりおん金切音まで響かせていた。今までの金属音ではない、もう武器も限界に近いのだろう。

此処からは ヤバイモードだ！！

二人の攻撃のギアが更に上がる。

「うおおおおああああ！！！！」

「せ、えええええあああ！！！！」

途中攻撃が何度も阻まれ弾かれ捌かれる中で、二人は血を吐く様に絶叫しながら、敬一は左右の剣を次々と叩き込み続けた。視界が灼熱し、最早ヒエニス以外何も見えない。全身をアドレナリンが駆け巡り、一種の酔った状態に陥りながらも、脳神経がスパークし直ぐに酔いは覚め、次に限界までそのスパークがアクセラレートされ、もつと腕を速くと信号を送り続ける。

ツツツガガガガガ！！！　と言う連続の衝激音が空間に木霊し、観客達も皆、固唾を飲んでいる。

カッアンツ！！

「あー！！」

「も、ら………つたアアああ嗚呼嗚呼！！！！！！」

舞い上がる両方の剣、迫る剛剣。

勝敗は 決した と、思ったその瞬間、

(俺は、俺は………、 負けられないんだよ………ツツ！！)

脳裏に過ぎる命令。

絶対成る命令は、敬一を復活させるには持つて来いの言葉だった。

（考える、考える俺、どうしたら勝てる、どうしたら勝てる、勝つにはどうする、勝つには隙を突く、隙を突くには隙を作る、隙を作るには、一撃が欲しい、正面からばっかりじゃあ駄目だ、なら後ろから？ 其処まで姑息なまねは出来ない、これは決闘だ、ならどうするどうするどうするどうする、高速での乱舞？ 弾かれた。超高速での速度を乗せた一撃？ 防がれた。速さで 速さ、はや、さ……？）

それは閃光の如き光。

脳内が真っ白に成る位の閃きが、敬一を蝕み、何かを開花させる。

それは、システム。

それは、敬一の初めて創った作品。

それは、速さを求めた結果に生まれた 究極速度の産物。

「俺は 負けられないんだよ……！！！！」

名前等知らない。

分かるのは この絶頂にも似た感覚。

己を包むのは真紅の煌きと発光。

相手が止まっている様に見得る。

ほら、避ける。

コマ割りの様に見得た一撃を、敬一は軽々と避けし、

「な　！？」

顔を驚愕の色に染めるヒエニスの後背に瞬間的に現れれば、手中に奇妙な剣を具現化し、

「これが　俺だよ……」

首元に添えた。

固唾を呑む観客。

静まり返る場内。

振るわれかけた一撃を見詰めたまま固まるヒエニス。

そして、

「降参だ　私の負けだ、……サクマ「ケイイ子殿」

紡がれ、綴られ、一斉に場内に雷鳴の如き歓声と、声援が満ちたのは、数秒後の事である。

第十話 今宵の宴、殺人鬼の冬の夢へ前篇

「で、どうしてこうなった……?」

「そ、それは、私にも分からないな……」

激闘から約2時間後、俺達はあの後エリシアを主としたメイド達に手当てをして貰い、勇者歓迎パーティーの様な物を舞踏会場で開いていた。

現在進行形で俺とヒエニスはレモン色をした炭酸の様な飲み物が入ったグラスを手に、女性陣に囲まれている。何だこれ、嬉しいのは嬉しいんだけど、複雑……。

「勇者様、此処にサインをっ」

「いや、私の此処に!」

「ヒエニス様あ、今夜、どうです?」

「あ、ずるーいっ」

本当に何だこれ、しかも女性陣、お願いだから少しは自重してくれ。周囲の視線が痛い程に鋭い。

結局俺とヒエニスは互いに苦笑してから「悪い、通してくれないか?」「済まない、少し私達も休みたい」と告げて、その輪から抜け出した。

「困った物だな、嗚呼言われても私達はどう対応すれば良い物なのかな」

レモン色の液体の入ったグラスに口付け、喉に流し込んでから、一息吐きながら肩を竦めるヒエニスに俺は「さあ、それは人それぞれじゃあないのか?」と肩を竦め、俺のその飲み物を口にした。

……炭酸飲料か? いや、酒、っぽいな、味は。まあ未成年だけ

ど大丈夫だろう、一応18だし。

1人頷いてから口内を液体で潤してから「この後どうなるんだ？」と椅子に腰掛けるヒエニスに視線をやって尋ねた。

「分からない。私もこう言うのは初めてではないが、今回ばかりは分からない」

首を横に振って肩を竦めるヒエニスに俺は「そうか」と頷いてから「まあ、行き当たりばったりになりそうだな」と溜め息を吐いた。

それにしても、あの時のあの速度　あれは、一体何だったんだろうか。

あれはもう人間の領域を超えた速度　無論、故に究極速度の産物なんだろうけど。

名前さえ分かればな……、図書館でも行って調べて見るのに。1人唸っている「勇者殿、食事でも取りに行かないか？」とヒエニスが俺に視線を向けて来た。

「ん、嗚呼、確かにあれだけ動いたからな　行くかね、っと、それと、勇者殿は止めてくれ。ケイイチ、で良い」

勇者殿何て凝り固まってて何か嫌だし、堅苦しいの俺嫌いなんだよね、ははっ。

「む……、良からう。ではケイイチ、行こうか」

少々悩んだのか沈黙し、しかし直ぐに微笑んでから、ヒエニスは頷いた。

「ん、じゃあ行こうか。ま、まあ……、今日はゆっくりしたいもんだがね……」

「それには……私も同感だ」

二人揃って溜め息を吐きながら椅子から立ち上がれば、食事を取りに行き、帰って来る途中に女性陣に囲まれたのは、言うまでもないと思うがね。

「これ、旨……」

新発見、生ハムメロンモドキは滅茶苦茶旨かった。

今俺の目の前の皿には、生ハムメロンモドキが数個、ロールキャベツモドキが更には盛ってあり、多分だが鶏肉モドキが盛ってある。結論から言わせて貰おう、全部滅茶苦茶旨い。

特にこの生ハムメロンモドキが何とも……、嗚呼、俺もう生ハムメロンモドキがあれば今日は良いや……。

「ん、良かったな。気に入った物が見付かったようで」

隣ではチキンの照り焼きモドキに齧り付くヒエニス。

何あれ、あれも超旨そうじゃん……、後で取って来よう。

「嗚呼、それにしても皆飲むなあ……」

俺もまあこれで三杯目なのだが、淡い桃色をした炭酸の様な飲み物を口に運び、喉に流し込んでから呟いてみた。

「うむ、今日は宴だからな。飲み比べ等もしているのだろう」

グラスの中身を飲み干したヒエニスは「飲み比べで何度酔わされた事か」と嘆いていた。一体何度酔わされたんだ……、てか其処まで飲むなよな……。

「へえ……、成程成程。つと、そうだ、今は何時だ　つと、0時

か……」

何ともう翌日だ。流石に寝ないと明日起きれないな……、って、学校じゃないのか……って言っても、まあ、早起きする癖のついた俺に早起きするなっるのが無理だけど。

そもそも学生に早起きするなって言うのは無理な気がする、まあ休日は確かに寝坊するけど、それでも9時までしか俺寝れないぞ……。

「もうそんな時間か……、そろそろ寝ねばな」

「だな、じゃあ此処ら辺で解散しますか」

「そうだな、ま、これから宜しく頼む。ケイイチ」

椅子から立ち上がり、皿を重ねていれば、ヒエニスが突然俺に手を差し伸べて握手を求めて来たので、

「嗚呼、此方こそ。ヒエニス騎士団長」

そう皮肉混じりに言ってやってから握手してやった。

数秒程握手してからアイコンタクトで俺達はこう呟いて、己の道を進んだ。

「（気を付けろ……、何されるか分からないからな）」

「（同感だ　汝こそ気を引き締める?）」

「（嗚呼、此処から先は柵だらけの肉の檻だ　修羅の道を歩むのは、嫌いじゃあないんだけどな）」

「（しがらみ?　しゅら……?）」

「（いや、何でもない。それじゃあまた明日な）」

「（あ、嗚呼、また明日）」

下手したら修羅の道以前に、修羅場の道になりそうな気もしたけどな……。

まあ何れにせよ、

「部屋まで速攻」

私室まで行けば俺の勝ちだ。

俺はそう願ってから赤絨毯の床を蹴り、駆け出したのだった。

「……」

状況が整理し切れないと、もうツツコム気すら起きなくなる。

「いや、分かるんだよ。疲れてて、そのままベッドに座ったら寝ちゃったって言うのは」

私室にて、俺は額に手を当てて苦悩していた。

「分かるんだよ、その気持ちはね？」

そのままベッドに腰掛ければ、そつとその赤茶色の髪に触れて、梳く様に撫でて見る。

うわお、この子もサラッサラ。良いなあ、どんなシャンプーリンス使ってるんだし。

「ん……、う」

「っ……」

と、危ない危ない……、起こす所だったな。
でもどうするかな、俺、何処で寝よう……。
顎に手を添え悩んでいると、

「ん、……、あ、れ……」

「あ……」

「………ツツツツ?!?!?」

「いやいやいやいやいやいやいやいやいやいや、何もして
ませんよ、断じて何もしていませんよ」

必死な弁解してから、俺は床に正座して、土下座する。
いや、土下座が一番じゃないかな、と思っただけでやってみてるんだが
……、普通に謝罪して叫ばれたら元も子もないし。

「……、嗚呼、私寝っちゃったんだね……」

「……はい、見事なまでに寝てました」

「……寝顔、見た？」

「見てません」

嘘だけ。

「ん……、でさ、アンタが今回召喚された勇者様？」

不意にそう聞かれたので、首を傾げる彼女に俺は立ち上がり「嗚呼」と頷いてから「サクマ「ケイイチ」って言う者でね、宜しく」と手を差し出してみた。

彼女は少々戸惑ってから「クレーターフィル「ヴァンティエキュートだよ」と続けてから俺の手を握り「気軽に呼んでくれて構わないから」と告げて、直ぐに手を離してから、部屋を去ってしまう。

「ちよ、待って　って……あー、行っちゃったよ……、それにしても長いな、……クレーターフィル、「ヴァンティエキュートか……。それじゃあクレーア、さん、かな……、うん、クレーアさんって呼ぼう、そうしよう」

愛称が出来、俺は満足して頷いてから、再びベッドに腰掛けて寝転んだ。

それにしてもクレーアの着ていたあの服……、メイド服じゃないな……、何だろう。

見た所、給仕服みたいなのを着てたから……、此処の料理人が何かかね？

ふむ……、まあ、可愛かったから良いか。

そんな事を寝転びながら考えれば、瞼が重くなるのを感じた。

「……、それにしても、究極速度の、産物、か……」

徐々に重くなる瞼。

襲い来る睡魔に抗いながら、再びあの時の刹那の出来事に思いを馳せた。

あの一瞬、それこそあの真紅の発光。

もう一度、辿り着きたい。あの領域に。
掴みたい、知りたい、アレ（・・・）を。
誰かがあれをやってくれば、参考に出来るんだが、な……。

朧気な気憶、霞む意識の中、ふわふわとする感覚に体が彷徨えば
俺の意識は深淵の闇へと落ちた。

風が強い。

宵闇、俺は何故かビルの屋上に居た。

「あれ……、また、夢　か」

「嗚呼、夢だな」

声がした。

声のする方を向けば、其処には俺と姿形全てソックリな、それこそ俺のクローンの様な奴が目の前に立っていた。

「お前、は……　俺？」

「嗚呼、俺はお前だ　理解が早いじゃないか。
ま、でも俺はお前とはまた違ったお前でもあるけどな」

「どう言う、事だ……？」

呼吸を殺し、俺は『俺』へと投げ掛けた。

冷たい突風が吹き荒れる。

「どうもこうも 俺は殺すのを専門とした……」

其処で気付く。

「？殺人鬼？なんだよ ……!!!」

その『俺』は、俺とはまた違った、危険なイメージをさせる者だ
と言う事に。

月光に煌き、周囲に光を四辺させる短刀の刃が、俺の首へと迫り
。

第十一話 今宵の宴、殺人鬼の夜の夢へ後篇

弾いた。

「ッ、何、しやがる……ッ!」

紙一重、短刀での横薙ぎの一閃を同じく短刀で受け止め弾いた俺は、目の前でポケットに片手を突っ込む『俺』に叫んだ。

「何って、さあ？ 俺は唯単にお前を殺したいだけだし」

「ッッッ……」

「さあ その魂が極彩と散るまで存分に殺し合おうか……、それが俺達の末路だよ、兄弟」

「テメエに、兄弟呼ばわりされる筋合いはねえんだよ……!」

言つと同時に、久し振りのコンクリートの床を蹴り、同時に短刀を縦一閃で斬り払う。

しかし、『俺』はその一撃を苦も無く受け止め弾き、返すとも言つ様に横一閃で応酬して来る。俺はそれを短刀を縦にする事で受け止め捌き、短刀を1度右側に引いてから、左、右での連携薙ぎ払い連撃を繰り出す。

「へえ 殺すには持って来い業だな」

「五月蠅え……ッ!」

ヒュンヒュッ！　と言う風斬音が響いた。短刀の刃は『俺』に掠る事もせず、『俺』が屈む事で避けたせいで短刀は空を斬った。俺は舌打ちしてから、次、とでも言う様に短刀を振り下ろす。それは縦一閃の一撃。屈んでいる相手には一番有効な一撃だ　が、

「眠い」

その一撃を『俺』はその一言と同時に短刀を掲げる事で受け止め、弾き飛ばしたのだ。

「テ、メエッ……」

「温い温い温過ぎる　やれやれ、これじゃあ殺す気も失せるな」

「……ッ」

ギリッと、俺は歯噛みする。

口の中で血の味がするのは、唇を噛んだからだろう　しかし、そんな事どうでも良い。今は目の前のコイツを　、

「殺す……ッ！ー！」

直後、俺は両目で『俺』を見据え、短刀を正面に突き出す様にしながら構えてから、駆け出した。

「全知の魔眼、か……、だが　お前にもあるのなら、俺にもあるんだぜ？」

ヒュ、ッ、轟！　と言う高い位置からの薙ぎ払う様に斜めからの一撃を振り下ろして見れば、その言葉を聞いて、俺は戦慄した。

『俺』の瞳が、紫と藍二色に染まっている　俺と、同じ　！！

「？狂楽くわくらくと痴ちれ？」

刹那、『俺』は短刀を居合いの形に構え、振り抜くと同時に何か見得ざる力を放ち、俺を吹き飛ばした。

「ツツツ！！！」

今は　見得た俺になら、分かるはずだ……、考える。

今は　超高密度の斬撃の威力を、衝撃波として飛ばしたのか……
超高密度と言う事は　精神力か何かを凝縮しているのか……？

頭に流れ込んで来る情報を整理しながら、体勢を立て直し、フェンスに激突する前に両足で着地し、短刀を再び低空に構える。

「楽しんでるか、兄弟。あの世界を？」

ツイン、と言う再び構え直す音が周囲に響き渡ってから、『俺』は俺同様に低空に構えた。

「嗚呼、多分な」

「それは安穩あんえいな、どうも、1度死ななきゃ直らないか？」

直後、二人揃って砂埃を巻き上げ、駆け寄った。

瞬間、激突。瞬間、衝撃。瞬間、閃光。瞬間、火花。

互いに腕を振るい、一撃一撃を弾き、捌き、相殺し合い、攻撃するチャンスを窺う。

と、脇から滑り込む様に短刀の刃が俺に迫った　が、俺はその

一撃を脇に体を逸らす事で避け、体を屈めれば、そのまま蹴り上げる。

「ッ、う……、やるじゃないか、だが、これは、どうだ……！」

其処で俺は見た。

俺が求めていた物を、欲した物を、今、掴みたい物を……！！

「？TRAN-SIMAvErFirSt？」

刹那 それこそ真なる刹那。

『俺』の肉体は真紅に発光し、瞬間的速度で俺に迫った。

「ッ、ち、いつ！！な、らあああ！！」

当たらない、なら当てるだけだ……！！俺は短刀を迫る『俺』の顔面めがけ振り抜く　が、

「甘いと言っただろう？　？奏でる四重奏？」

一撃は当たる事なく擦り抜け、代わりに短刀での横薙ぎの一撃が俺に直撃した。

それは刃の方ではなく、峰の方での一撃。

「ッ、が……、あ……！！！」

アバラが何本がいった気がした。

吹き飛んだ俺はそのままフェンスに直撃し、胃の内容物が逆流する。

肺から酸素が無理矢理吐き出されれば、一瞬意識が真っ白になり、呼吸が止まる。

「ッ、そ……、たれ、が……!!」

「これがお前の求めた？究極速度の産物？だろ？」

周囲を真紅に照らしながら『俺』は俺に歩み寄り、その発光を消失させてから、笑った。

嗚呼、そうだよ。それが俺の求めた、欲した、見たかった、力だ。

「ま、もう求める事も欲す事も見る事も赦されなくなるかな」

嗚呼 死ぬのか。

振り下ろされる短刀の刃。

嗚呼 終わりか。

良いのか？ 此処で終つて。

轟と言う、死への最短距離とも思える一撃が俺の首に触れ、

約束は 良いのか？

瞬間 俺の中で、それは弾けた。

「そうは させるかあああああ!!」

俺の瞳もまた、紫と藍に染まれば、その首に触れた短刀が首を薙ぎ飛ばす前に真紅に発光し、体を屈め回避すれば、体を翻し、一瞬の内に『俺』の右肩から左脇腹に掛けて短刀を振り下ろし、滑り込ませ、斬り捌いた。

「が、ッ、 ?! な、ッ、ッ、く、そ 皮膚かよ……、たっ

た、二分割、何て、な　　！！」

直後、煙の様に消滅し始める『俺』に俺は発光と瞳の光を消失させてから「俺はお前を殺したただけだ　二分割だろうが、七分割だろうが知った事か」と告げ、短刀も消滅させる。

「ッ！！　覚えていろ、俺はお前の影、お前が一瞬でも油断すれば俺は其処に付け込んで、その体を意志を、全て俺の物にしてやるからな！！　は、はははは、はっあはははははは　　ッッ！！！！」

風に乗る、完全に消滅した『俺』の残痕を見詰めてから俺は舌打ち、呟く。

「胸糞悪いんだよ……、油断なんかしないし、奪わせねえよ、『俺』」

揺れる視界に、俺は限界が来たと悟り、そのまま座り込む。

座り込んだまま、残痕の隣に寝転び、腕を、足を投げ出せば、その夜空を眺めた。

青き、触れれば砕けそうな月に、冷えた空気、瞬く星々はまるで先程までの舞台の観客の様。

嗚呼　勝ったの、か……。

「TRAN - SAM I ver F i r s t ……か」

嗚呼　これが俺の欲した力、求めた速さ、見たかった物だったのか　。

俺の視界は黒に染まり　、右手で、風を握ってから俺は眠りに

付いた。

「あれで良かったんだろ？」

「うん、あの子は情緒不安定気味だからね」

広い夜。

見渡す限りの草原の中で、少年と『俺』はぼんやりと月を見ていた。

月が近いせいだろう。

昨夜黒い海に似ていた草原は何かのステージの様に明るい。
冴え冴えとした月光に照らし出された広場。

それが、何処かの劇場の様だと少年は思った。

「情緒不安定？ あれでか？」

「ん、あの子には人は殺せない　あの子の場合は感情を殺して人を殺すパターンしか出来ないからね」

「んあ？　嗚呼、暗殺にゃあ不向きな野郎って事だな」

そうだね、と頷く少年は、周囲を見回す。

周囲には幕は無い。

世界を見渡す限りの草原で、カーテンの様な木々も無ければ観客

も団員もありはしない。

あるものは月光と白い闇だけ。

風は吹かず、草は揺れる事さえしなかった。

「静かだよ、今夜は」

「嗚呼、しかも今夜はこんなにも月が綺麗だ　何て人を殺すには
持って来いの月なんだろう」

「殺人鬼、君も此処で終わりだよ」

「初代主人公がどの面下げてそれを言うんだよ　佐治」

佐治、と呼ばれた少年は肩を竦めて「良いじゃないか、初代主人
公は終らずとも」と続け「主人公は健在であるべきなんだからさ」
と苦笑した。

「嗚呼　なら、殺人鬼も、いや　お前は確か神様とやりに近い
存在だったな　なら？殺神鬼さつじんき？も健在であるべきだ」

瞬間、二人の間の空気が一変した。

風が吹き始め、緊張の糸が張り詰める。

「さあ、掛かっておいでよ？殺神鬼さくま〓紗紅けいいち魔刑一？君」

「嗚呼、言われずとも殺す？ワールドエンド・クリエイター世界創造者〓佐治雅彦？！」

そして二人は駆け出す。

噛み合う筈なかつた歯車が噛み合い、世界が歪み始める。

世界を蝕み、世界を喰らう。

黒き草原と言う舞台上で踊るのは二人の少年。

観客は夜空の星々と月だろうか？

幕は無い、団員もいない。

そんな中、スポットライトである月光は二人を照らし続ける。

嗚呼　　こんな夜。

少年は笑う。

待っているのだ、己を超える主人公が現れるのを　　。

そしてそれから数時間後、彼等の舞台の終幕を見た者は、自然以外、誰一人とて居ない　　。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0984z/>

The Last Act 終焉のラグナロク【改】

2011年12月13日02時07分発行